行政が核となり幼小連携を推進するための参考資料
平成 31（2019）年３月

平成 30 年度幼小ジョイントプロジェクト
～鹿沼市の取組～

栃木県総合教育センター幼児教育部
栃木県幼児教育センター

「幼児教育の成果を小学校教育へ（H28 栃木県幼児教育センター）」より

幼小連携のさらなる充実のために

子どもの交流活動

先生同士の打合せ

一緒に学校探検

小学校へようこそ

Point!
- ○幼児・児童の双方のねらいを明確にし、互いに学びのある活動を展開しましょう。
- ○年間計画に位置付け、幼稚園や保育所、こども園と小学校が一緒に活動の立案・実施・評価を行うことが望まれます。

教職員の相互理解

相互の職場体験

保育・授業の相互参観と協議

合同の研修会

Point!
- ○保育や授業を相互に参観したり体験したりして子どもの発達や学びに視点をおいて話し合いましょう。
- ○幼稚園・保育所・こども園・小学校の教職員が一緒に研修に参加し、互いの教育について積極的に語り合いましょう。

連携組織の設置

- ●幼小連絡協議会
- ●幼小連携推進委員会 等

連携の様々な取組が、効果的に行われるようコーディネートする役割があります。

連絡体制の整備

園だより・学校だよりによる情報交換

教育委員会内の使送ボックス
（幼稚園・保育所・こども園宛て）

定期的な情報交換会

Point!
- ○連絡体制の整備は、行政機関が中心となって進めることが大切です。幼稚園、保育所、こども園、小学校が積極的に意見を交換し、地域の特色を生かした組織をつくりましょう。
- ○教職員が互いの顔や名前が分かり、日常的に情報交換をしたり相談したりするなど、定期的・継続的な連携が望まれます。

一貫性のある指導計画の作成

伝え合う力を育てるための
年長から一年生へのカリキュラム

入学当初のスタートカリキュラム

Point!
- ○子どもの発達を把握し、見通しを持って指導することが必要です。そのためには、育てたい子どもの姿や、能力などを互いに話し合い、どのような指導がどの年齢で必要か明らかにします。
- ○それらを踏まえ、幼児期の「遊び」を充実させ、児童期の「学習」に生かしていくために適切な手立てをカリキュラムに位置付けましょう。

幼小連携を推進することで

子ども

☆一人一人の発達や学びの連続性が保障されます。
☆自分や友達のよさに気付き、遊びや学びが広がります。

教職員

☆子どもの発達段階を知ることで、教職員の子ども理解が深まります。
☆互いの教育を理解することで、自身の教育観が広がります。

保育・授業

☆幼児教育から小学校教育への滑らかなカリキュラムの接続により、改善・充実が図れます。

栃木県幼児教育センターは、幼小連携の取組をサポートします。

連携に関する講話・研修・保育及び授業研究会などにアドバイザーを派遣します。お電話ください。

【連絡先】TEL 028-665-7215 FAX 028-665-7216
E-mail yokyo-c@tochigi-edu.ed.jp

目　　次

Ⅰ　幼小ジョイントプロジェクトとは　・・・・・・・・・・・・・・・・・２

Ⅱ　平成３０年度鹿沼市の取組　・・・・・・・・・・・・・・・・・３

１　概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・３

２　幼小ジョイントプロジェクト　・・・・・・・・・・・・・・・・・４

第１回：キックオフミーティング

第２回：授業公開・協議　鹿沼市立菊沢東小学校

第３回：保育公開・協議　認定こども園仁神堂幼稚園

第４回：交流活動・協議

第５回：次年度に向けた協議

３　スタートカリキュラムの見直し　・・・・・・・・・・・・・・・１４

４　鹿沼市幼小連携のための研修会　・・・・・・・・・・・・・・・１６

Ⅲ　さらなる幼小連携の充実にむけて　・・・・・・・・・・・・・・・１７

Ⅰ　幼小ジョイントプロジェクトとは

幼児期は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な時期であり、幼児教育は、義務教育及びその後の教育の基礎となるものです。「栃木県教育振興基本計画 2020 －教育ビジョンとちぎ－」においては、「幼児教育の充実」を基本施策の一つとして掲げ、その主な取組として「幼児教育と小学校教育の連携の深化・拡充」が示されています。その中に、「市町の教育委員会や保育主管課等との連携を密にし、市町の現状に即した取組を支援し、その成果を県全体に発信する」とあります。

これを受け、幼小ジョイントプロジェクトでは、県内１市町を指定し、年間５日の計画で市町教育委員会や保育主管課と協力して、大学教授等の助言の下、市町の幼小連携を推進しています。幼稚園・こども園・保育所等から小学校等にわたり、子どもの発達や学びの連続性が確保できるよう、幼稚園・こども園・保育所・小学校等の教職員が合同で保育・授業を参観し、協議し合うことで、教職員の「子ども観」「教育観」の相互理解を深め、教育・保育の質の向上を図ることを目的としています。

平成 30 年度は、鹿沼市で実施しました。鹿沼市では、市内全小学校のスタートカリキュラムを幼児教育と小学校教育の両方の視点から見直していくという事業の方向性がありました。そこで、そのためのモデル園・校として、市内の１こども園、１小学校が指定されました。教職員による相互の保育参観や授業参観、幼児と児童との交流活動を通し、互いの教育の理解を深めながら、スタートカリキュラムの見直しを図ってきました。その際､「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を幼小どちらの教職員も強く意識するよう、栃木県幼児教育センター発行のリーフレットを常に傍らに置き、保育・授業参観や協議等を行いました。一緒に目の前の子どもを見ながら、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を幼小で共有し、深い話合いを積み重ねてきたことは、スタートカリキュラムの見直しに色濃く反映されています。幼小のカリキュラムの接続をより一層円滑なものにしていく一つの手立てを提示してくれたものと思います。

本資料では、鹿沼市の実践と成果を紹介します。各市町や地域における幼小連携推進の参考にしていただければ幸いです。

Ⅱ　平成３０年度鹿沼市の取組

１　概要

【幼小ジョイントプロジェクト】

回	日・会場	内　　容
第１回	６／13（水） 認定こども園 仁神堂幼稚園	〈　**キックオフミーティング**　〉 １　挨拶　　県総合教育センター幼児教育部長　新村　幸江 ２　基調講話「スタートカリキュラムの見直しに向けて」 宇都宮大学大学院教育学研究科教授　青柳　　宏 ３　説明「スタートカリキュラムの見直しについて」 県総合教育センター幼児教育部指導主事　黒川　貴広 ４　説明「プロジェクトの方針について」 鹿沼市教育委員会事務局学校教育課指導主事　増田美紀子
第２回	７／３（火） 菊沢東小学校	〈　**授業公開・協議**　〉 １　第１学年国語科「すきなこと、なあに」 鹿沼市立菊沢東小学校　教諭　安藤　孝枝 〃　　助教諭　廻谷　　芽 ２　協議 ３　指導講評　　宇都宮大学大学院教育学研究科教授　青柳　　宏
第３回	10／18（木） 認定こども園 仁神堂幼稚園	〈　**保育公開・協議**　〉 １　年長「動物園ごっこ」 認定こども園仁神堂幼稚園教諭　石川江理子 〃　　教諭　青柳　彩香 ２　協議 ３　指導講評　　宇都宮大学大学院教育学研究科教授　青柳　　宏
第４回	11／20（火） 菊沢東小学校	〈　**交流活動・協議**　〉 １　年長・第１学年「あきまつり」 ２　協議 ３　指導講評　　宇都宮大学大学院教育学研究科教授　青柳　　宏
第５回	１／24（木） 菊沢東小学校	〈　**次年度に向けた協議**　〉 １　園訪問「就学間近の年長児の姿」 ２　協議 （１）平成31年度スタートカリキュラムについて （２）平成30年度幼小ジョイントプロジェクトについて ３　指導講評　　宇都宮大学大学院教育学研究科教授　青柳　　宏

【スタートカリキュラム見直しの打合せ（ジョイントプロジェクト以外）】

８／２（木）	総合教育センター	見直しの方向性・箇所・期間の確認
11／１（木）	総合教育センター	見直し作業の進捗確認
12／10（月）	総合教育センター	単元配列表・週案の様式の確認
１／10（木）	菊沢東小学校	見直し作業後のカリキュラムの最終確認

【鹿沼市幼小連携のための研修会】

２／18（月）	菊沢コミュニティーセンター	・ジョイントプロジェクトの成果発表 ・鹿沼市の今後の取組について

第１回

２　幼小ジョイントプロジェクト

第１回：キックオフミーティング　　（平成 30 年 6 月 13 日　15:30～16:30）

会　場　認定こども園仁神堂幼稚園
参加者　小学校２４名、幼稚園１０名、大学・行政７名

○挨　拶　　県総合教育センター幼児教育部長　新村　幸江

スタートカリキュラムを幼小の視点から
デザインしていくプロセスに意味があります。

○基調講話「スタートカリキュラムの見直しに向けて」

宇都宮大学大学院教育学研究科教授　青柳　宏

【自発性の育ち】

２０年以上前から、幼稚園、小学校、中学校に関わり、幼稚園から中学校までの子どもの育ちのつながりを強く感じている。荒れた中学校の中で、自分を保ち、乗り越えていける子どもは、「こうしていこう！」と思える子であり、幼児期の自発性の育ちがしっかりしている子である。小学校で、自発性を太らせていければよいのだが、この時期の発達段階から、いい子であろうとし教師や学校に表面上従っていく子は多い。小学校教育への適応と自発性を育てていくことは、二者択一ではなく、どちらも大切なことである。

【学校探検・交流活動】

どちらも、合科的に実施している学校が多いことと思う。ここに自発性を組み込んでいく。活動は同じであっても、一人一人が不思議に思うことは違う。その先にある課題も異なる。それを活動につなげていくことが大切であるが、難しいのは、既存の教育カリキュラムの中でこれを組み込むことができるかどうか。それを突破できてスタートカリキュラムに魂が入っていく。

スタートカリキュラムに「魂」を入れる

そのための教育方法が、次の３点である。

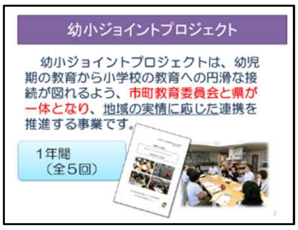
①子どもたちが語り合う場をこれまで以上に意識的に設定する。
②どんな活動をしていきたいか、子どもたちに話し合わせ、子どもたちにゆだねる。
③子ども同士の関係性を、子どもたち自身で築いていけるようにする。

⇒　スタートの小学校低学年だけの話ではない。学校教育全体を改革していくための重要な基盤である。このことが、中学校、高等学校を変え、子どもの豊かな心の育ちにつながっていく。

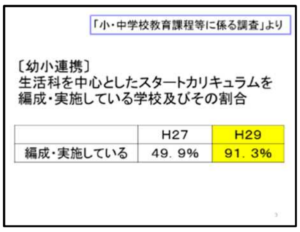
○説明「スタートカリキュラムの見直しについて」

県総合教育センター幼児教育部指導主事　黒川　貴広

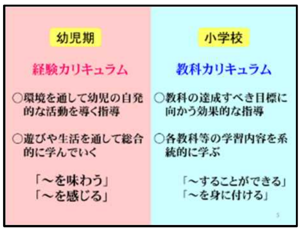
ジョイントプロジェクトの趣旨や目的等を伝えました。



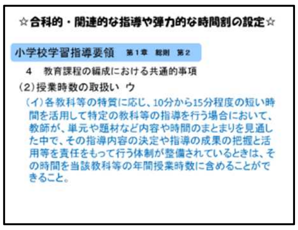
幼児教育から小学校教育へ円滑な接続が図れるよう鹿沼市をバックアップします。



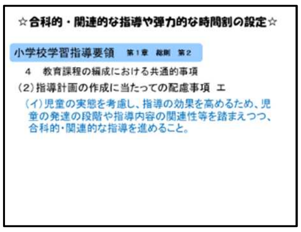
県全体では91.3%の小学校がスタカリを作成しています。鹿沼市は100%です！



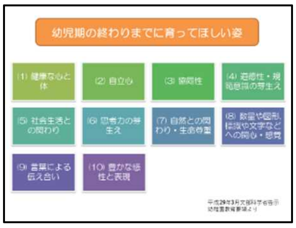
接続の際は、幼小の違いを十分に理解し、互いを尊重することが大切です。



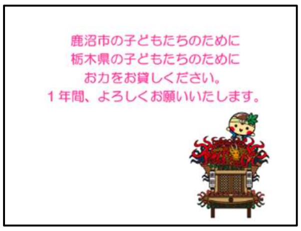
学習指導要領に、弾力的な時間割（いわゆるモジュール）の規定があります。



合科的・関連的な指導についても規定があります。



スタートカリキュラムを見直す際、１０の姿を活用することが、キーポイントです。



鹿沼市がスタートカリキュラム見直しの先進市となってください。

○説明「プロジェクトの方針について」

鹿沼市教育委員会事務局学校教育課指導主事
増田　美紀子

【スタートカリキュラムの見直しについて】

平成 29 年 3 月に告示された学習指導要領等では、「資質・能力」を三つの柱で幼稚園等から高校まで貫く考えが示されている。その中で、一番初めの接続である幼小間が大切であり、スタートカリキュラムの意義は大変大きなものである。鹿沼市では、全ての小学校においてスタートカリキュラムが編成されているが、形骸化しているものも散見されるため、全市をあげて、見直し作業を進めていく。

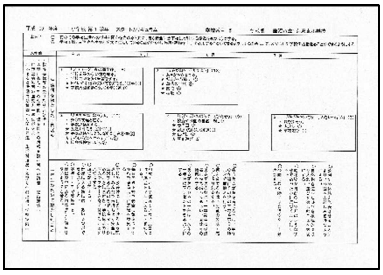
【スタートカリキュラムの見える化】

小学校での学びが見えにくいという意見が、幼稚園・保育所等から出ている。全ての小学校のスタートカリキュラムをデータ化し、見える化していきたい。

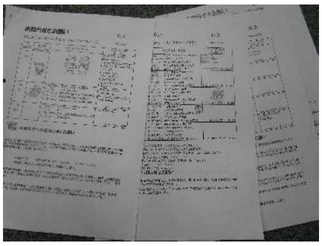
【見直し作業の視点】

幼小互いの教育観の交流をベースに据える。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と「主体的な学び」を常に確認しながら、見直しを進めていく。

○配布資料○



モデル校既存のスタートカリキュラム。これをベースに見直しを進める。



保護者向けの週予定。モデル校の実際のカリキュラムが分かる。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿のリーフレット。手元に置いて確認する。

第2回

第２回:授業公開・協議　鹿沼市立菊沢東小学校(平成 30 年７月３日　14:00～16:30)

【ねらい】
公開授業での１年生の姿から、「スタートカリキュラム」の指導のポイントを共有し、見直しに向けて協議を行う。

第１学年　国語科学習指導案

平成 30 年７月３日（火）５校時
１年１組　２４名
指導者　安藤　孝枝
フレンド担任　廻谷　　芽

単元名　　すきなこと、なあに（３／４）
ねらい　　・「すきなこと」と「その理由」を順序よく二文で書くことができる。（書く能力）

学習活動	時・形式	支援と指導上の留意点	資料等
1　ことば遊びをする。	１０分 全	・動作化によって促音の特徴を理解させる。 ・グループで「っ」集めゲームをさせる。 ・動作化と同時に、口をしっかり動かして言葉をはっきり話させる。	・ＭＩＭ資料
2　本時のめあてを確認する。	５分 全		
すきなことをかいてしらせよう。			
3　好きなことを知らせる文章を書く。	１５分 個	・自分のことをもっと知ってもらいたいという気持ちを、書く意欲につなげる。 ・前時の視写を振り返りながら、書き方を確認する。 ・読み手を意識させ、わかりやすく丁寧に正しく書くことを意識させる。 ・書いたら読み直し、間違いがないか確認させる。	・書き方ポイント掲示資料 ・マス目カード
4　ペアで読み合う。	５分 ペア	・書いた文章をペアで発表したり、文章を交換し読み合ったりさせる。	
5　本時の振り返りをする。	１０分 全	・書いた文章を発表させ、次時の予告をし、次時への意欲をもたせる。	

評　価　　・「すきなこと」「その理由」を順序よく二文で書くことができたか。（カード）

前時までの学習を子どもたちとやりとりをしながら、振り返る。

図工で描いた「好きなこと」の絵を見ながら文を書く。

ペアで書いた文章を読み合い、「好きなこと」を伝え合う。

◆参観の視点
授業の中で、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をもとに、幼稚園で培われた「学びの根」が、現在の子どもたちに、どうつながっているか。

○授業者から

子どもたちは、絵を描いて、それを話し言葉で表現して、それから文にする段階を踏むと、スムーズに入れる。絵を描く（好きなことを見付ける）ためには、様々な経験や遊びが必要になってくるので、幼稚園での経験等が生かされてくると思う。

▶本単元「すきなこと、なあに」（４時間）
１：言葉による伝え合い（相手に伝わる楽しさ）
２：教科書の例文（主語と述語、句読点）
３：　【　本　時　】
４：感想の伝え合い（思いの交換）

本単元「書くこと」では、書いて、話して、書いて、話して・・・という活動を繰り返してきた。国語以外でも、一人一人の思いを大切にし、文字にする楽しさを味わわせてきた。書いた文字は、ずっと残り、相手に時間を超えて伝わる。書いたものを「廊下にはりたい！」と言い出す子どもたち。他のクラスの友達にも見てもらいたい、という強い思いを感じた。

○協議（幼稚園２グループ、小学校２グループに分かれて）

・あふれる思いを自然体で話している雰囲気が良かった。
・言葉にこだわらず、他教科での「絵」の使用が良かった。
・「書く」前に子どもの自発的な表現を大切にしていることが、幼稚園の育ちが生かされているように感じうれしかった。
・園でも、自分の思い、その理由を友達同士で話し合う経験を十分にしている。そのつながりを感じた。

○指導講評（ 宇都宮大学大学院教育学研究科教授　　青柳　宏 ）

	ぼ	く	は	、	て	つ	ぼ	う	が	す	き	で	す	。	れ	ん	し	ゅ	う	を
す	る	と	、	た	か	い	の	も	で	き	る	か	ら	で	す	。				

Ｓ児が、自分で描いた逆上がりの絵を見ながら、上のように書いた。「てつぼう」の「う」に「お」を書くかどうか迷いがあった。一度はあきらめそうにもなっていた。自分の思いを懸命に懸命に文字にしようとしている姿である。

他の子どもたちも「思い」を表現していた。多くの子どもたちの姿から、これまでの幼稚園と小学校との連携を強く感じた。

○振返り（スタートカリキュラムに関して）

小学校目線でしか見られていない自分に気付いた。小学校生活に「順応する」という考えを見直す必要があると思う。（小学校）

幼小の接続が円滑となり、体系的な教育が行われるためには、今日のように、幼児教育からの視点をもらえるとありがたい。（小学校）

第3回

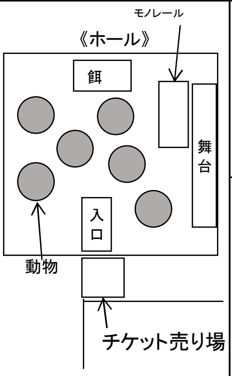
第３回：保育公開・協議　認定こども園仁神堂幼稚園（平成 30 年 10 月 18 日　①10:30～11:30 ②15:30～16:30）

【ねらい】
　公開保育での年長児の姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をもとに振り返り、子どもの姿を共有し、スタートカリキュラムの見直しに向けて、協議を行う。

認定こども園　仁神堂幼稚園　　平成　30　年　10　月　18　日　（木）	園長印	担任印
活　動　案		

ひまわり　組	5　歳児	22　名	担任名	石　川　江理子
ゆ　り　組	5　歳児	23　名	担任名	青　柳　彩　香

主題	動物園ごっこ	ねらい	・自分の役割を理解し、友達と関わる中で言葉による伝え合いを楽しみながら最後までやり遂げ、達成感を味わう。	留意点	・一人一人が自分の役割を発揮し主体的に活動に取り組めるように支援する。
幼児期の終わりまでに育ってほしい(10の)姿	①健康な心と体　②自立心　③協同性　④道徳意識・規範意識の芽生え　⑤社会生活との関わり ⑥思考力の芽生え　⑦自然との関わり・生命尊重　⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 ⑨言葉による伝え合い　⑩豊かな感性と表現				

時間	活動の流れ	環境構成	留意点	(10の姿)
10:30	○前半20分 ・ひまわり組…動物園の係 ・ゆり組…お客さん ○後半20分 ・ゆり組…動物園の係 ・ひまわり組…お客さん	 	○クラス毎に整列してホールに移動する。 ○お客さんのクラスは各自財布を持って行く。	④ ⑤⑧
10:35 (前半)	○動物園 ・ホールに移動し、自分の係に付いて係の仕事をする。 《係》 ・切符売り場 ・入り口 ・餌売り場 ・モノレール ・各動物（5～7か所）	《準備物》 ・看板 ・切符 ・お金、財布 ・動物のプレート ・動物の餌 ・動物 ・モノレール	○自分の係に付き、自分なりの言葉でお客さんと話せるようにする。 ○一人一人が自分の役割を積極的に行えるように支援する。 ○園児全員が自己を発揮しながら係を担当できるよう見守りながら支援する。 ○事前に全員が役割を持てるように話し合いの中で係を決め、一人一人が主体的に活動に取り組めるよう配慮する。 ○自分なりの捉え方を生かし、模倣した遊びが楽しめるようにする。 ○言葉のやり取りの中で文字や数等の概念を理解し表現できるように助言する。	②③⑨ ②④ ②⑥⑩ ③⑥⑨ ⑩ ⑥⑧⑨
10:55 (後半)	○お客さん ・お金が入ったお財布を持って行く。 ・切符売り場で切符を買う。 ・入場し、動物を見たり餌をあげたりする。 ・園内を好きなように周って楽しむ。 ・それぞれの動物の工夫して作られているところを見付けながら見て回る。		○動物園の係の指示を聞き、子どもたちでやり取りできるよう言葉を繋いだり仲介したりしながら援助する。 ○なるべく多くのエリアを見て回れるよう促す。 ○お金のやり取りや管理などについて、説明したり声掛けしたりする。 ○一人一人が楽しめるように配慮した環境構成になるようにする。 ○園児が意欲的に参加できるよう期待感あふれる内容にする。 ○友達と相談し合って行動を決めるなど、自分の意志を他に伝えられるように助言する。	③④⑤⑨ ⑤⑧⑨ ⑤⑩ ②⑩ ③⑨⑩
11:20	◎明日の遠足の注意を聞き、見学に対しての期待を持つ。 （24日午後：縦割り保育の年長児が動物園係を務める）		◎明日の遠足で動物園を見学し、加えたいところや変えたいところを見てくるように促し、意欲を高める。	①④⑤⑥⑦⑨
評価、反省	・子どもたち自身で意見を出し合いながら、協力し合って活動することができたか。 ・一人一人がそれぞれの活動に関して達成感を得ることができたか。			

動物のえさ売り場。「50 のお金を 2 個ください」

小動物コーナー。「うさぎは何が好きですか？」

動物園のリーフレットを見て、必要性に気付きました。

◆参観の視点
「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をもとに、保育の中で、児童につながる「学びの根」が、どう培われているか。

〇本日の保育について

次の日が上野動物園への遠足で、それを挟んで「動物園ごっこ」を展開している。これまで、子どもたちの話合いから始まり、７日活動してきた。これまでのそれぞれの経験や動物園のリーフレットをもとに、思いを出し合い、みんなで作り上げてきた。

〇協議（幼稚園、小学校混ざっての３グループで）

- １年生がやっているものと似ていますが、目標や目的に大きな違いがあることに気付きました。
- 小学校は、限られた材料の中で想像して工夫して作る。幼稚園は、たくさんの素材があって、作りながら考えている。

- 動物園の係員になりきることで、場に合った丁寧な言葉が自然と出ていた。
- 予想外なことが起きたときに、子ども同士ですぐに話し合う雰囲気ができていた。
- 幼児期の遊びが小学校のスタートカリキュラムにつながっていると分かり安心した。

- モノレールへの思い、ペンギンへの思い、それぞれの思いから、遊びが展開している。
- 遊びの中で数や量を自然と扱い、子どもの中からルールが生まれている。幼児期にどれだけ遊び、経験できるか、なのだと思う。

〇指導講評

（県総合教育センター幼児教育部副主幹　前原　由紀）

『幼児の自発的な遊び＝学び』である。係員とお客を交代するよさもある一方で、一人一人のこだわりを追求することも考えたい。遊び込むことと教師の意図のバランス。

幼児教育と生活科との違い

・幼児教育・・・・一人一人のやりたいことからのスタート
・生活科　・・・・共通の目的に向かって、それぞれが役割を感じて活動する。

（宇都宮大学大学院教育学研究科教授　　青柳　宏）

今日の保育で、「自立」の姿、「協同」の姿を目の当たりにして感動した。こうした姿を小学校ではどう生かすかが課題である。年長時の「こういうものが作りたい」という思いを遊びの中で自分の形にしていく力が大切で、それが、自分自身の生活を創り出していくことにつながる。それがあって、「話したい！書きたい！」といった小学校の学習が成立する。

だからこそ教師は、一人一人の表現を丁寧に見取っていきたい。そのためには、教師が介入し過ぎず、「見守る」ことが大切である。

第４回

第４回：交流活動・協議　　（平成 30 年 11 月 20 日　①10:15～11:30　②15:30～16:30）

【ねらい】
「あきまつり」の交流学習における幼児・児童の学びの姿を共有し、スタートカリキュラムの見直しに向けて、協議を行う。

幼小連携学習活動計画書

活　動　場　所	実　施　期　日	時　間	教科領域
菊沢東小体育館	平成３０年度 11月20（火）	１０時２０分～ １１時３０分	生活科 あきをたのしもう

引率者氏名	参加児童及び人数
仁神堂幼稚園： 園長先生・主任先生 担任教諭 本校：　安藤・臼井・ 廻谷・布施	仁神堂幼稚園 年長組　４５名 本校１年生　合計　４９名 １組　２５名 ２組　２４名

主な活動内容	配慮事項
事前準備　店・ゲーム等の決定（小学生の思い・幼稚園児の思い） 商品やゲーム看板の制作 御神輿制作 招待状とポスターの作成 １０：２０～１１：２０　菊沢東小学校、体育館で交流	・学校で幼稚園生は自分達より小さくて幼いことを充分に理解させておく。言葉遣いに配慮する。 ・ゲームのやり方を優しく教え、出来ないときは一緒に活動させる。 ・どのブースにも行けるようにスタンプカードを活用させる。 ・大きな声で挨拶をしたり説明したりできるよう事前指導をする。 ・幼稚園児と交流することで一年生には先輩になる気持ちが持てるようにさせる。

時	活　動　内　容
９：３０ ９：５０	・体育館の会場準備 ・おみこしや売店テーブルの設置
１０：２０	・開会式（１年生中心に） おみこしを一緒にかついで回る。（４グループずつ）
１０：３０	・体験活動（１０ブース設置） １年生→店やゲームの店員 幼稚園生→スタンプカードを持って各ブースをまわる
１１：０５	・体験終了（片付け・トイレ休憩）
１１：００	・ゲーム（ジャンケン列車）
１１：２０	・閉会式

○交流を行うに当たって工夫した点

【幼稚園年長児の思いをくむ】

小学校に幼稚園児を招く形式のため、幼児がお客さんになりがちである。そこで、幼稚園では、幼稚園側の活動のねらいを明確に伝え、小学校では、相手意識について考えさせることにした。具体的には、「おまつり（鹿沼市の子どもたちは共通のイメージがある）」に対する

おまつり売店の様子

年長児の思いを聞くことから始めようと、１年生の児童同士で話し合い、それを言葉にして、幼稚園に届けた。受け取った幼稚園は、それを基に、幼児同士で思いを出し合い、幼稚園教師の意図も合わせる形で、小学校に戻した。

【振返りを幼小共同で行う】

　一般的には、それぞれの場所に戻ってから行うことが多い活動の振返りであるが、これを同じ場所で行った。そうすることで、プレゼントを渡し合うなど、思いの交換の余韻の中、素直な気持ちを表現することができた。また、互いの気持ちを直接聞くことは、自分の振返りに影響し、活動を通して感じたものをより豊かに言語化する支えとなった。

○協議（幼稚園、小学校混ざっての３グループで）

・きらきらと目を輝かせ、主体的に活動する１年生が、この時期の小学校への憧れとも重なり、年長児によい刺激となった。
・子どもの思いを大切にすることが、「喜んでもらいたい」というねらいに迫り自己有用感につながった。

２時間×３日
（計６時間）

幼稚園生を呼びたい！でも遠い幼稚園は難しいよね・・・

お店の数、多すぎてもできないよね。いくつならちょうどよいかな？

魚釣りは、前は磁石でやったよね。じゃぁ、今度は・・・

「幼稚園生を楽しませたい！」
という、１年生の思いからスタート

こういうのが、おまつりって思ってるみたいだよ。

紙じゃ、ぐにゃぐにゃになっちゃうよね。スーパーのトレーでやったことがあるな～。

僕の大好きなお花を幼稚園生にあげたいんだぁ。

幼児期に育んできた資質・能力に支えられている

○指導講評（ 宇都宮大学大学院教育学研究科教授　　青柳　宏 ）

・１年生が「作りたい」ものと「実際にできる」ものは違う。しかし、「作りたい」ものを大人がくみ取って作っても満足はしない。これは、大人と子どもの間にイメージのギャップがあるからである。年長児も同じ。イメージを自分で実現していく、形にしていくことができる。素材は保育者が用意するが、使うのはあくまでも子どもである。大人が待てるかどうかが、分かれ目になる。
・今日の活動は、何よりも子どもの熱気と意欲がダイレクトに伝わってきた。そして、幼児は、児童が作ったものに惹かれていた。大人にはない、イメージの近さである。
・「一人一人の思いに寄り添っていくことの重要さに気付く」ことは、小学校低学年だけの話ではなく、高学年にもつながっていく。「自分で物事をイメージし、作り上げ、コミュニケーションしていく」ことは、幼・小・中・高を貫く。大人と子どものイメージの違いをじっくりと受け止め、課題としていきたい。

第５回

第５回：次年度に向けた協議 （平成 31 年１月 24 日 ①11:50～12:15 ②15:30～16:30）

会　場　鹿沼市立菊沢東小学校

【ねらい】
年長児の姿から、今年度の「スタートカリキュラム」をもとに、次年度のスタートカリキュラムを作成するための協議を行う。

○園訪問「就学間近の年長児の姿」

就学が近付いてきたこの時期の年長児の姿を捉え、次年度のスタートカリキュラムに反映させるため、給食前から給食開始時間の普段の様子を見学した。

○協議（全体で。見直されたスタートカリキュラムを見ながら）

園訪問で見取った年長児の姿を具体的に出しながら、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、就学間近の年長児に育まれている資質・能力について話し合った。それを受けて、これまで見直してきたスタートカリキュラムの確認を行い、次年度のスタートカリキュラムの作成を開始した。

以下のエピソードは、園訪問で見られた年長児の姿である。

1、2、3、4、5･･･あれ、ひとりたりないよ。

今日６人のお客さんが来ることが、担任から伝えられていた。ところが、１人が遅れてくることになったため、最初に来たのは ５ 人。どう数えても５人しかいないことを不思議に思う。

⇒数への感覚、担任から伝えられていたこととの整合性、状況の理解などの姿が見られる。

どうしても、とうめいにならないんだよー。

前日にカップに水を入れておいて、凍ることを楽しんでいた。凍るものと凍らないものがあり、「もっと量を少なくすると凍るんだよ」と自信をもって答える子がいる。寒い場所かどうかは関係ないようだった。中に葉っぱなどを入れて凍らせることも楽しんできたが、今は、透明に凍らせることに夢中のようだ。

⇒思考力の芽生え、自然との関わり、粘り強さなどの姿が見られる。

えっ！？　・・・・・

給食の準備をしている時に、足元に落ちていた友達のタオルに気付き、何も言わずに、フックに掛け直す。その後、手洗い・うがいをするが、隣の友達がコップを探しているのを見て、さっと、友達のコップを差し出す。「えらいねー。優しいねー。」と声をかけるが、いつもやっていることだよ、そんなにすごいことかな、といった表情を浮かべていた。

⇒道徳性の芽生え、集団での生活の習慣、衛生面への意識などの姿が見られる。

4がつから、ほんとうのおねえさんになるの！

小学生になることを意識して、どの子も今まで以上に張りきっている様子がうかがえる。「４月になったらね・・・」とたくさんの子が話しかけてくる中、一人の女の子が「本当のお姉さんになる」と発言。みんなが「えっどういうこと？」と不思議がる中、「４月に赤ちゃんが生まれるの！だから本当のお姉さんだよ！」と嬉しそうに話す。

⇒言葉による伝え合い、自立心、期待感などの姿が見られる。

○指導講評（ 宇都宮大学大学院教育学研究科教授　　青柳　宏 ）

▸ 中学校でスクールカウンセラーをしていて、「小学校がお膳立てをし過ぎるから、中学校で自立しない。だから、中学校もお膳立てをしている」という声を聞く。スタートカリキュラムは接続期で終わりではなく、小学校全体をアクティブにしていかなければならない。

▸ 自分の思いを伝えるのが、未熟な低学年である。思いがあって、関わろうとして、手が出てしまうこともある。先日、けんかやふざけ合いを早期に「摘み取る」ことを徹底するという記事があったが、本当にそれでよいのか疑問である。スタートカリキュラムでは、行動を「摘み取る」のではなく、「学び」に変えていきたい。

▸ 「僕はどうして縄跳びができない。神様はどうして？」と表現した子どもがいた。このような思いにならない小学校教育でありたい。達成の前に楽しさを感じてもらいたい。そのためにスタートカリキュラムがある。スタートではなく、根っこのカリキュラムである。

○振返り

【幼稚園教諭】

・小学校の先生が、幼児の発達や園側の思いを知り、それをスタートカリキュラムに生かそうとする思いが、回を増すごとに強く感じられた。園でも、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をより強く意識し、子どもの学びの基礎となるような保育に努めていきたい。

【小学校教諭】

・幼児は、様々なことを経験し、小学校へ期待感を高めて入学してくることを知った。教師が心に余裕を持ち、一人一人の違いをプラスに考えることで、言葉かけが変わってくる。すると、今まで時間をかけてきた小学校導入の指導が短時間で済み、子どもの思いをゆっくりと聞く時間が生まれると考えを改めた。それは、自立への近道であると思う。

３　スタートカリキュラムの見直し

鹿沼市教育委員会の指導・助言の下、モデル校の菊沢東小学校が既存のスタートカリキュラムの何を見直してきたか、簡単に紹介します。

（１）実施時期

既存のスタートカリキュラムは、７月までを期間としていたが、今回重点的に見直していくに当たり、特に重視している最初の１か月を実施期間とすることにした。

４～７月　➡　４月１１日（入学式）～４月２７日（GW前）

（２）期待する児童の姿

児童一人一人が確かに成長することを目指し、学校全体で期待する児童の姿をより明確にするために、「ねらい」から「めざす児童像」へ変更した。

ねらい　○初めての学校生活への期待と関心を高めると共に、自ら安全に登下校しようとする意欲をもつようにする。
○学校では、友達や先生などが共に生活していることが分かり、施設・設備を上手に活用することができるようにすると共に、楽しく安心して学校生活を送ることができるようにする。

⬇

めざす児童像　○安心して、自分の思いが伝えられる子ども

（３）時間割・単元

実施時期を短縮化したことにより、この時期の具体的な時間割や単元が一目で分かるとよいということから、それを盛り込んだ。その際、児童の思いや学びに向かう姿勢が連続性のあるものになるよう、一部時間割を入れ替えた。

（４）配慮事項①

教師の具体的な指導の在り方や指導に当たっての意識の持ち方など、共通認識のもとで進められるように、教師が意図的に行わなければならない活動か、それとも、児童に任せられる活動か、といった視点で、各配慮事項を見直した。

（５）配慮事項②

「配慮事項①」の検討により、質的に統一感が見られるようになった。更に「めざす児童像」との関連を図ることができるように、「めざす児童像」に向かうためのより具体的な配慮事項に整理し直した。

➡ 実施時期を３期に分け、各期のキーワードの下、整理
１期：児童の思いを聞く。教師、教室、友達を知る。
２期：友達とつなぐ。関わりを増やす。
３期：自分の思いを伝える

（６）配慮事項③

配慮事項の意図が全職員に伝わりやすいよう、吹き出しを設け、教師の具体的な言葉かけの例を示した。また、「めざす児童像」を支える環境構成については、別枠を設け、整理し直した。

（７）週案①

フェイスシートには、時間割を載せるようにしたが、具体的な内容が分かるように、スタートカリキュラム専用の週案を別に作成することにした。今年度４月に実際に実施した時間割・内容（児童の様子を見ながら柔軟に行った）を基に作成した。

（８）単元配列表

児童の思いや願いをきっかけとして始まる学びを教科等の学習において大切にし、また、児童の意識の流れに合わせて、各教科等がつながっていくような単元の構成と配列を一から考え直した。どのような関連があるか分かるように全教科等の単元を図で示しようにした。

（９）見直しの時期

継続的にスタートカリキュラムが見直されるよう、実施後の見直しのタイミングをあらかじめ、決めておくことにした。

- 夏季休業中　⇒　実施後すぐに反省を生かすようにする
- １～２月　⇒　次年度入学予定の幼児の集団の様子を反映させる。（いくつかの園を訪問する）

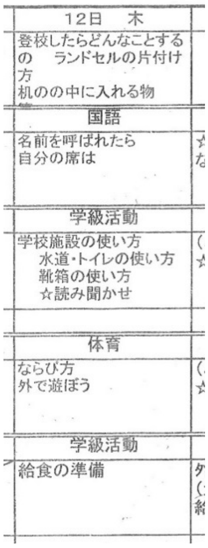
> 次年度の児童の受け入れは、どのようなスタートがよいか？ただし、「適応」ではなく、「よさを生かして」生き生きとしたスタートとなるように。

（10）週案②

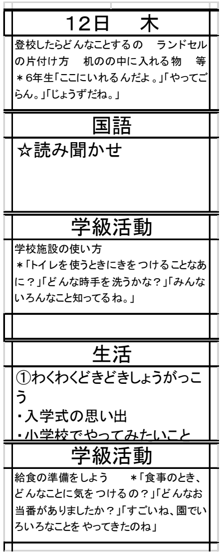
各教科等・単元の関連が週案上でも分かりやすいように表記内容を工夫した。

さらに、「めざす児童像」にむけて行う教師の意図が全職員で共有できるように、言葉かけの具体例を盛り込んだ。

【例】



12日　木
登校したらどんなことするの　ランドセルの片付け方 机のの中に入れる物
国語
名前を呼ばれたら 自分の席は
学級活動
学校施設の使い方 水道・トイレの使い方 靴箱の使い方 ☆読み聞かせ
体育
ならび方 外で遊ぼう
学級活動
給食の準備



12日　木
登校したらどんなことするの　ランドセルの片付け方　机のの中に入れる物　等 ＊6年生「ここにいれるんだよ。」「やってごらん。」「じょうずだね。」
国語
☆読み聞かせ
学級活動
学校施設の使い方 ＊「トイレを使うときにきをつけることなあに？」「どんな時手を洗うかな？」「みんないろんなこと知ってるね。」
生活
①わくわくどきどきしょうがっこう ・入学式の思い出 ・小学校でやってみたいこと
学級活動
給食の準備をしよう　＊「食事のとき、どんなことに気をつけるの？」「どんなお当番がありましたか？」「すごいね、園でいろいろなことをやってきたのね」

４　鹿沼市幼小連携のための研修会

全５回の幼小ジョイントプロジェクトの成果発表と今後の鹿沼市の取組について、「鹿沼市幼小連携のための研修会」が開かれました。

○日　時　平成 31 年２月 18 日（月）　14:00～16:30

○参加者　鹿沼市内全小学校から各教諭１名　計２５名
鹿沼市内幼稚園・こども園・保育所から教諭・保育士等　計２２名
鹿沼市教育委員会事務局学校教育課指導主事　５名
栃木県教育委員会上都賀教育事務所指導主事　１名
栃木県総合教育センター幼児教育部指導主事　２名

○次　第

1　開会
　○教育長あいさつ　　鹿沼市教育委員会教育長　高橋　臣一
　○諸連絡
　○講師紹介
2　研修
　(1) 講話「望ましい接続期の教育のあり方とカリキュラム」
　　　栃木県総合教育センター幼児教育部副主幹　前原　由紀
　(2) 発表「幼小連携推進者養成研修者によるジョイントカリキュラム」
　　① 鹿沼市立中央小学校　教諭　高野久美子
　　　沖保育園　保育士　福田　智美
　　② 鹿沼市立菊沢東小学校　教諭　安藤　孝枝
　　　鹿沼みどり幼稚園　教諭　岡田　幾子
　(3) 発表「幼小ジョイントプロジェクトの取組」
　　　鹿沼市指定モデル校　鹿沼市立菊沢東小学校　教諭　大久保昌江
　　　鹿沼市指定モデル園　認定こども園仁神堂幼稚園　教諭　石川江理子
3　鹿沼市における今後の取組について
　　　鹿沼市教育委員会事務局学校教育課指導主事　増田美紀子
4　閉会

会場の様子

Ⅲ　さらなる幼小連携の充実に向けて

今年度の鹿沼市のジョイントプロジェクトは、ねらいを「幼小のそれぞれの視点から、スタートカリキュラム及びアプローチカリキュラムを見直す」としました。特に、「全小学校のスタートカリキュラムを今後見直していく」という鹿沼市の事業の方向性から、スタートカリキュラム見直し作業のモデルとしての役割も担いました。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をキーワードに、保育・授業参観、そして、協議を繰り返してきました。目の前の子どもたちの姿を深く掘り下げ、幼稚園と小学校で子どもが育んでいるものについて、その共有化に努めてきました。そうしたことで、スタートカリキュラムの見直しにおいて大前提となるであろう、児童の発達の特性や幼児期の発達について、今まで以上に理解を深めていくことができました。

今回紹介させていただいた５回のジョイントプロジェクトやスタートカリキュラムに関する打合せ以外にも、実は、多くの話合いが持たれています。それは、幼小接続期を大変重要な期間と認識する幼稚園・小学校の先生方の、子どもを思う熱意から生まれたものでしょう。そして、それを支え、方向を明確に示し続けてきた鹿沼市教育委員会に敬意を表します。

モデル校としてのスタートカリキュラムの見直しは、素晴らしい形で行われたと思います。大切なのは、「どこをどのように直したか」ということではなく、それに向かって話し合いを続けた過程にあったのではないかと思います。それが、スタートカリキュラムに魂を込めるということであり、目の前の子どもの学びを真に支えるものになるのだと思います。次年度からの全小学校のスタートカリキュラムの見直しが、順調に、そして子どもにとって意味あるものになることを期待しております。

最後に、幼小ジョイントプロジェクトに１年間熱心に取り組んでくださった認定こども園仁神堂幼稚園、鹿沼市立菊沢東小学校の皆様に深く感謝申し上げます。

鹿沼市教育委員会学校教育課　増田　美紀子　指導主事より

今回、幼小ジョイントプロジェクトを通して、幼児期の学びを小学校教育に生かすということの意義を改めて考えました。ある方が、十人十色ではなく、「一人十色」と表現されていますが、子どもを画一的に見ていなかったか、それぞれのよさに余裕をもって目を向けられていたか、と反省させられます。

様々な園から様々な子どもを受け入れる小学校からすると、早く学校生活に適応させたい、授業の形を整えたい、と思ってしまいますが、それは、時として一人一人が持っている学びの芽を摘んでしまうことにもなりかねません。上越教育大学の木村先生は、教育とは本来、「引き出す」ことだと表現されています。子どもたちが、持っている力を引き出していけるような、魂の入ったスタートカリキュラムにしていきたいと思います。

【今後の予定】
2019 年度～　全小学校のスタートカリキュラム見直し
2020 年度～　全小学校のスタートカリキュラムのデータ化
　　　　　　　市内全幼児教育施設に提示

地域で取り組む「幼小連携事業」の参考にしてください。

行政と幼・こ・保・小の教職員が一体となって、栃木県の幼小連携を推進しましょう！